

## 第3章 調査研究業績

### 1 禮文島に於ける「エヒノコツクス」症に就いて (第3回現地調査報告)

北海道立衛生研究所（所長 中村 豊）  
(同研究所疫學科長 安保 毅)  
(北海道大學醫學部教授)

北海道立衛生研究所技師 市川 公穂

道衛生部豫防課の絶大なる援助下に行われた主題の調査研究は既に2回に及んだ。その報告は本所報第1及び第2集に發表した所である。

然しながら後述のような状況によつて幾多の苦心に拘らず未だ吾等の目的としているエヒノコツクス症の本態即ち犬等の終宿主に寄生する猾粒條虫或は中間宿主なる人或は家畜類又は鼠猫等の肝或は肺に寄生して本症の原因となる同虫の幼虫を發見するに至らない。かくては確實なる本症の豫防對策の樹立に完璧を期し難い。

ここに於て筆者は第3回の現地出張調査殊に検索資料の蒐集を志した。特に渡航の困難なる冬期を選んで荒天波浪を冒して決行したのは野犬或は狐が食料を得んとして人家近くに彷徨することを期待し、これを捕獲し得て好材料を得んがためであつた。

#### 1. 第3回現地調査の目的

禮文島のエヒノコツクス症は第1，第2回（その前に道衛生部豫防課及び北大醫學部第一病理武田教授等の調査がある）の現地調査及びその得たる材料についての検索（研究室にて）に拘らず猾粒條虫を發見し得ない。即ち第2回の周到なる調査並びに研究によつて吾々の當面している禮文島エヒノコツクス症は検索上の成績の挙げ難いものであることが判つた。これまでに既に60餘頭の犬の剖見が専門家によつて行われているがこの寄生虫を見出し得ない。又中間宿主であることが疑われる鼠についての検索も、同島各所の水についての卵子の検出も不成功に終つた。そこで第2回調査の歸結として本病虫の終宿主は大正12年千島から移入された狐（現在では野性になつてゐる）ではなかろうかということになつた。

今回現地出張調査の目的は 1) 狐の棲息場所を知り、これを出来るだけ捕獲或は射殺してその腸について検索を行うこと 2) なお犬についても飽くまで追究すること 3) 中間宿主と疑われる鼠を出来るだけ多く捕獲してその肝或は肺を検査して患歎なる事、及び出来れば頭節乃至鉤を見出すこと。

在住患者で進んで外科手術を受けんとする者が皆無の現況では、以上の如き検索方針を一層強化する以外に手段が見出せない次第である。

## 2. 調査並びに目的動物捕獲の経過

今回は幸にも道衛生部環境衛生課（當衛研兼務）高橋弘博士・札幌醫大衛生學教室長谷川氏の同行援助を得たのみならず、環境衛生課松井氏、稚内保健所田中氏、沓形在住獵師成田氏更に現地では船泊村役場諸橋氏、同川野谷氏、香深村役場高橋氏等が一行に加わつての熱心な援助を得た。

即ち一行は2月17日稚内發、通い船の小汽艇にて同日午後3時禮文島船泊大備に着き、調査並びに狐、犬及び鼠の射殺或は捕獲を開始した。島内の往復は殆んど徒步による外なかつた。

大備には19日午後2時まで止まり、その間に野犬6、準野犬1、鼠5を得た。

19日夕白濱着（大備より12km）。兼ねて狐が棲息しておると聞くスコトン附近の捕獲方法を協議した。

20日アワビコタン五郎太岬の絶壁で待望の狐2頭を射殺することに成功した。射手は足首を縛つて岩壁より乗り出し、約120米直下の狐を射殺し、その屍體を引き上げ得た。1頭は銃聲に驚愕し上方に逃げ来つたのを續いて射殺したのである。

同方面に於けるこの間の收獲は狐の外、鼠2であつた。野犬は全然見られなかつた。

21日午後大備に出發。その間なお鼠3匹を得た。午後2時30分大備着。爾後の方針を協議。又狐の解剖を行つた。

22日一行は2班に分れ、高橋、長谷川両氏は船で香深に直行して調査を開始し、爾餘の者は獲物を求めて陸路を行つた。即ち烈しい吹雪を冒して上泊（大備より5km）に着き1泊、翌23日に至つても吹雪やます、獲物の收獲無いため同23日又も吹雪を衝いて香深井（上泊より12km）まで強行することに決し、午前9時上泊を發し同12時内路着（上泊一内路5km）、午後2時同地發夕刻香深井着。香深にて鼠5匹、猫2頭を得た。

24日は雪霽れ、香深井にて野犬3、いたち1、鼠2を得た。香深にて鼠6。

25日、香深井にて鼠3を得たのみにて野犬は已に部落附近に現われず、直ちに香深に向い出發。午前10時半香深着。（香深井—香深4km）。午後0時同メンバーにて元地に向つた。急坂に喘ぎつつ同地に至り（香深→元地3km）野犬3を射殺剝檢。同夜1泊、この日香深にて猫2鼠8を得た。

26日元地には已に野犬現われず、知床岬方面に狐の状況を探り、更にウエンナイに渡るべく八方手を盡したが住民は皆その不可を説いて肯んぜず、一旦香深に歸つた。

27日、高橋氏歸札、他の者は香深と元地に根據を定め、香深では鼠、元地にては狐に努力を集中する事とした。香深にて3月1日に至るまで鼠40を得た。元地にては北はウエンナイに至る3分の1行程、南は知床岬に至る廣範囲の絶壁に狐を求める、その姿は兩三度散見したが遂に得ず、この間獵師成田氏の眞摯な努力は村役場吏員並びに住民にその生命を危惧させる程であつた。

## 3. 検査材料動物の總數

以上の日程に於て得た動物と、その数は以下の如くである。

- |        |                       |    |
|--------|-----------------------|----|
| i) 狐   | (アワビコタン)              | 2  |
| ii) 野犬 | (大備・神崎・香深<br>井・香深・元地) | 13 |

iii) 鼠	(大備・神崎・スコトン・上) 泊・香深井・香深・元地)	86	いえねずみ 26 どぶねずみ 60
iv) 猫		7	
v) いたち		2	

#### 4. 狐の棲息情況について

エヒノコジクス症の調査研究の主眼は犬から狐にむけられてきたから同島の狐について叙述する。

大正12年放養せられた狐は一時大いに繁殖したが、その後密殺食糧難、就中野犬の跋扈により激減した。従つて現在同島に棲息するのは限られた數であつて而も人、野犬の近づき得ない場所に棲む。即ちアワビコタンより知床に至る西海岸の絶壁である。平地には狐の足跡は決してみられない。ただ夜間、食を求めて絶壁を出入すると思われる足跡が殆んど一定の場所に見出されることはある。従つて之を捕獲するには夜間この通路に罠或はその他の仕掛けをするか、或は晝間絶壁中腹の凹地にて遊ぶのを射殺する事が考えられる。

但し、住民の話によれば罠は殆んど成功した例がないようである。即ち、今回アワビコタンに於ては風の關係で絶壁上端の岩は露出してをつた爲、上方より射殺する事に成功した。之に反し元地方面に於ては一様に大なる雪庇を形成してゐる爲、大部分の場所に於て下を俯瞰する事は不可能であつた。又絶壁は深海に望み、崖下を行くとすれば岩石傳いであるが、岩石には海苔が一面に叢生し之を雪が覆つている爲、波浪のない時でも甚だ危険である。

従つて今後狐を捕獲するには冬期罠以外の仕掛けを用うるか、夏期（但し通路の發見及び狐の姿を目撃する事は非常に困難となる。）絶壁上端より射殺する以外にない。

#### 5. 現在までの検索概要

2頭の狐の腸壁に於て、猾粒條虫を想わせる異物は認められなかつた。

13頭の野犬の中6頭には、その腸壁に於て、曾て問題となつた白色の纖毛様の小突起物を見出した。然し歸札後札幌の畜犬4頭を剖検した處、1頭にこれを検出し得たので、やはりこれは無視さるべきものとの前報の見解を裏付け得たと思う。

86匹の鼠に關しては肉眼的に明かに包虫症と思惟されるものはなかつた。目下組織學的検索を續行中である。なお7匹の内臓は生で持歸つた。

猫・いたちの腸壁に於ても猾粒條虫と目されるべきものは認められなかつた。

以上の諸動物の寄生虫並びに卵子に關しても詳細なる検索は目下施行中である。

最後に今回の舉に當り、困難を冒して終始協力を惜しまれなかつた高橋・長谷川・松井の諸氏、稚内保健所、船泊、香深村役場の各位及び成田氏に深甚な謝意を表します。又患者の供覽、臨床経験の開陳等、種々の御教示を賜つた香深在住醫師柳谷誠三氏に感謝する次第であります。